

長崎原爆遺構を歩く

県原水協常任理事 内田 武志

被爆直後、特設救護病院 なり、十日午後には針尾院として使用された新興 海兵団救護隊二百四十九善小学校校舎は現在の市 人がきて、ここを宿舎に立図書館の場所にありました。学校統廃合で取り 日を追って、各地から壊されましたが、市民の 医師が派遣され終戦の翌強い要望で一部が残さ 日には「新興善救護病院」となりましたが、こ

特設救護病院跡 興善町の長崎市立図書館内



救護所となった新興善小学校

市民要望で保存、再現

⑤

この間に数千人の被爆者をここに収容し治療したといわれますが実数は不明のままです。

被爆直後の救護所の様子は悲惨なものでした。「教室にも廊下にもいたるところにムシロが敷かれ多くの被爆者が寝かされていました。息もたえだえの人たち、ある者はうなり、ある者は悲痛な表情で泣き叫ぶ、全身焼けただけ半裸のまま這(は)いまわっている女性、頭髪がやけどげ背中にうじがうごめいている男性、そんな人たちであふれかえり」「次々に亡くなり、前の女子商業の焼け跡で火葬したが、その火は九月下旬頃(ころ)までたえることがなかった」「消毒薬さえなく港から海水を汲(く)んできて煮沸して使った」など、救護に携わった看護師や医師の体験が廊下に展示されています。

(つづく)